

1 人工林伐採跡地における木本類の生育に関する調査

2
3 山本 克巳（滋賀県琵琶湖研セ）
4

5 滋賀県の人工林はその多くが伐採適期を迎えており、今後伐採が進むことが予想される。
6 しかし、経済的理由等により伐採跡地の再造林が放棄される可能性もあり、そうなれば森
7 林の多面的機能が保全できないおそれがある。そこで、県内の伐採跡地における木本類の
8 生育状況を調査し、天然更新の可能性を検討した。また、伐採跡地の天然更新が十分に進
9 行しないことが懸念されるため、調査地の一部には高木性樹種の苗木を低密度で植栽して、
10 その成長量を調査した。

11 平成 24、25 年度にそれぞれ 13、3 箇所の伐採跡地で木本類の生育状況を調査した。伐採
12 後の経過年数は 3～15 年と幅があるが、木本の成立本数密度は 1,200 本/ha～16 万本/ha（中
13 央値 6,500 本/ha）であった。構成樹種はアカメガシワ、カラスザンショウ、クサギ、タラ
14 ノキ等の先駆樹種が多く、またシカの生息密度の大きい調査地はシキミ、アセビといった
15 シカの不嗜好性植物で占優されていた。コナラやアラカシ等の高木種の稚樹は、伐採跡地
16 周辺にそれらの母樹がある場合のみ認められた。

17 滋賀県では『天然更新完了基準』として伐採後 5 年目に樹高がおおむね 1.5m 以上である
18 更新対象樹種が、湖南、湖北地域でそれぞれ 2,500、2,000 本/ha 以上の密度で成立してい
19 るという要件を設けている。調査地の多くはその基準を満たしているものの、先駆樹種等
20 で占優される場合が大半であったことから、今後これらの森林において高木性樹種の侵入
21 等により遷移が進行していくか、継続して調査する必要がある。

22 また、平成 25 年 3 月に 3 箇所の試験地で、それぞれスギ、クヌギ、ケヤキの苗木を植栽
23 し、その成長過程を調査した。植栽密度は 1,000 本/ha とした。その成長量は、防鹿柵の内
24 側では 2 年間で 50～200cm 程度であったが、柵の外側では全ての苗木がニホンジカの食害
25 を受けほとんど伸長成長がみられず、枯死した個体も多かった。また、柵内では下刈り
26 を行ったほうが植栽木の成長は大きかった。草本による被陰や物理的の被圧などが木本の成長
27 阻害原因となっていることがわかった。

28
29 キーワード：伐採跡地、天然更新、低密度植栽
30
31